

# すてきなあなたへ

編集発行：宮ノ台女性井戸端会議  
連絡先： 佐倉市宮ノ台4-12-1  
Tel&Fax：043-461-7004

## 市民としてできることって、どんな？

### ある検討委員会に参加して

ある検討委員会の公募に応募した。分厚い資料を渡され全部に目を通すことから始めた。以前『広報さくら』のモニターをしたことがあったので軽く考えていたらとんでもなかった。

非常に細かい規定があり、それらを頭に入れなければならなかった。1ヶ月に1～2回の検討委員会には有識者の委員の皆さんと意見を述べ合う。有識者の皆さんは大所高所からご意見を述べられるのに対して私は一般市民の感覚で言うほかなく、私自身がずいぶん勉強させていただいた。

佐倉市に越してきて31年、地域には何かと頭を突っ込み積極的に参加してきたと思っている。その中で「これはちょっとおかしいのではないか」、「他に何かいい方法がないか」と思うことが多々あった。それが今回活かされたのではないかと思っている。

佐倉市に住んでいる赤ちゃんから高齢者まで佐倉市の施策や支援の中で生活している。「自分は佐倉市に何もしてもらっていない」と思っている方がいるかもしれないが、学校や自治会、健康診断、医療、公共施設や道路等々数え上げればきりが無いほど、大なり小なりの支援を受けている。他の市との比較をすればまだ足りない部分も多いでしょうし、新たな要望もあるでしょう。そんな時は直接市に対して意見を伝えることができる。

佐倉市のホームページを見ると、いろいろな方法があることがわかる。積極的に利用されることを勧めたい。(宮ノ台、RT)

## 市役所に聞きたい！ちょっとおかしくない？

### そんなときどうしますか

1. 「市民の声」ご存知ですか 市役所の玄関を入ると、左手に「市民の声」の窓口があります。市政への意見は、手紙、FAX、Eメール、電話でも受け付けます。「市長への手紙」の用紙は出張所にもありますが、形式は問いません。回答が欲しい場合は、氏名、住所、メールアドレスの記入が必要です。3週間くらいで、市長名ながら、実質的には担当部署から回答が来るはず。匿名で、質問と回答がホームページ上に掲載されることがあります。
2. 担当部署に出向くことも アポを取り付けた上で、一人か何人かの有志で出かけ、口頭でやりとりができます。言い放しにならないように文書を持参し、回答を要望しましょう。
3. 「市長懇談会」というものもあります やや広域の問題であれば、自治会や町内会を通

し、地区の自治会協議会に提出し、市長懇談会での要望項目として、回答をもらうことができます。広域の市民に問題を知ってもらうことには有効です。ただし、自治会、自治会協議会がかえってバリアになることも考えられます。ストップがかかることがあるからです。

**4. 佐倉市が公募する委員会や審議会の委員になることもできます** 本号に寄稿されたRTさんのように、RTさんが参加された委員会の議事録を筆者も読みましたが、毎回、率直な意見が交わされているのがわかりました。しかし、ほんとうはおかしいのですが、大方の審議会の委員は、常連のような専門家や地元の役職者から選任され、市民の公募枠は少ない上、関係部署が課題作文などでフルイにかけます。市役所側の意向が強く反映されるのも事実です。でも、自分の関心事であれば、ぜひ、挑戦してみたいはかがでしょうか。

**5. 投書する？ ブLOGGERになる？ ことも** また、一人でもできる新聞などへの投書があります。採用は必ずしも簡単ではないようです。とすれば、いまどき、ネットを使わない手はないでしょう。ブログやホームページを立ち上げて、責任ある発言を続けていくのも、一つの方法でしょうか。行政側は、「わが市の評判」が気になるらしく、かなりチェックをしているようで、いちばん熱心に読んでくれるかもしれません。ただ、2チャンネルはいけません。筆者自身は馴染めませんが、ツイッター、フェイスブックなどもあるでしょうか。

**6. 出るところに出て、監査請求？ 裁判？ も** こと金銭にかかわれば、住民監査請求という方法もあります。不正な支出をただすことができます。市民の監査請求によって、不正な補助金を返却させた例があります。かつては「広報さくら」に全部掲載されたのですが、どういうわけか、現在は、市民には市政資料室での公開になりました。また、不服審査制度を経ないと裁判に持ち込めないケースがあります。筆者は、佐倉市内の土地区画整理事業に対する千葉県からの公管金（道路造成等公共施設のための支出）査定過程に疑問があったので、不服審査の申立てをしたことがあります。申立人による口頭説明、不服審査会の論議を経て、その経過・結果が公表されます。民事・刑事裁判も可能ですが、筆者には経験がありません。時間と費用の算段があれば、行政側の論理を崩すことができるかもしれません。

**7. 議員になる？** でも、市民の意見が届かないことがほとんどです。市役所は、耳を傾けるフリはするのですが、基本的に、市民の意見をすぐさま反映することは、ごくマレなことです。市議会議員になるのも一つの方法ですが、誰にでもできることではありませんね。

**クレーマーや自己満足に終わらないために**

住みやすい街にするにはどうしたらいいのか、すぐにできることから始めたいですね。大切な私たちの税金で成り立つ国の行政や自治体行政、市民がもの申し、異議を申し立てることは当たり前です。さまざまな方法で、持続的に質していくのが、むしろ市民の義務のような気がしています。（U.M）

**編集後記** ◇RTさん、ご寄稿をありがとうございました。◇菅沼さんによればシュレンドルフ監督の次回作「パリよ、永遠に」（2015年3月7日、Bunkamura ル・シネマほかにて公開）は、第二次大戦末期、実際に計画されたヒトラーのパリ壊滅作戦を描いているそうです。

## ベルリンへ、ふたたび～壁の崩壊から 25 年

2008年に訪ね、できればもう一度と思ったのが、ベルリンであり、ドイツだった。語学の壁は厚いけれど、二人なら何とかなるだろうと、フランクフルト、ライプチヒ、ベルリンの8日間の旅となった。効率は悪いけれど、気ままな旅になったかもしれない。11月9日はベルリンの壁が崩壊してから25年になる。

### 黄葉散り敷く、17番ホーム

ベルリンの2日目、10月25日、郊外の高級住宅地として名高いグリュエネヴァルト、その駅の17番ホームを訪ねた。変哲もない郊外の駅に降り立つと、無蓋の長いホームが隣にあった。地下通路から矢印に沿って階段をあがると、あたりの木々から散った黄葉をびっしりと敷かれたような、果てしもなく続くホームに思えた。この17番ホームで何があったのか。73年前にさかのぼる。案内書によれば、1941年10月18日は、この貨物列車専用ホームから、集められたベルリンのユダヤ人が、収容所に送り出された最初の日だった。以降1945年3月27日まで、1万7000人のユダヤ人が、このホームから送り出された。その記憶をとどめるために、このホームには183枚の鉄の銘板が敷き詰められ、一枚一枚に「25. 1. 1942/1014/ JUDEN/BERLIN-RIGA」のように刻されている。これは「1942年1月25日、1014人のユダヤ人をベルリンからリガに送った」ことを意味する。その日付が刻されている銘板のホーム側に、白バラが延々と供えられていて、降り続いた雨に打たれ、散りかけている花も多かった。花に添えられたカードも何枚か置かれていた。これらの花やカードは、今年は10月15日に行われた追悼記念行事の際に供えられたものだとわかった。もともと、ドイツの駅には改札というものがなかったので、このホームにも外からの出入りは自由で、ジョギングの若者や犬と一緒にご夫婦や家族連れの散歩にも出会った。しかし、73年前のこんな秋の日以来、酷寒の日も、新緑の季節にも、多くのユダヤ人が貨物同然にこのホームから送り出されていた。そして、その行き先はリガやテレジンの強制収容所であり、アウシュビッツのような絶滅収容所であった。足もとの黄葉を踏みしめ、散り急ぐ落葉を身に受けて過ごす時間は、私にとって、胸のつまる、重いものだった。ナチスの狂気は、たどってゆけば、国民の選択の結果でもあったのだ。自国民のしてきたことをきちんと受け止め、その責めを負うべく努めているドイツ、「自虐史観」とか「誤った歴史認識」とか称して、歴史的事実さえ葬り去ろうとする声が強まる日本、その行方を思うと、不安が募る旅でもあった。(D)



# 菅沼正子の映画招待席 41

## シャトーブリアンからの手紙

ナント事件って、ご存じですか？1941年10月、ナチス占領下のフランス・ナントの街で、占領軍の1人のドイツ将校が、フランスの共産党員に暗殺された事件である。ヒトラーはその報復として、収容所にいるフランス人150名の銃殺を命じる。映画は、暗殺事件発生の前日から、銃殺までの4日間の緊迫の実話を描く。監督は「ブリキの太鼓」(79年)で世界的に知られるドイツ人監督フォルカー・シュレンドルフ。ドイツで生まれフランスで教育を受け、ドイツとフランスをよく知るからこそ、事件の判断も冷静である。実在のジャーナリスト、ピエール＝ルイ・バスの資料およびノーベル賞作家ハインリヒ・ベルの小説、作家エルンスト・ユンガーの著述から着想を得て、監督自身が脚本を書いている。この3人の名前は映画の冒頭に出てくる。2012年のベルリン国際映画祭で上映された際には、銃殺した側のドイツの観客がスタンディングオベーションで拍手を贈ったという。

パリのドイツ軍指令本部でさえも、ヒトラーの無謀な命令に困惑している。何とか回避しようとするが、即刻犯人逮捕ができない限り、時間稼ぎするのが精いっぱい。シャトーブリアン郡庁舎も喧々諤々。罪のないフランス人をなぜ殺せる？副知事は拒否するも、報復の人選リストアップを命じられる。ドイツ人のユンガーは、事の成り行きを一部始終記録することを命じられる。これが冒頭に述べたユンガーの著述である。ユンガーはフランスに敬意さえ払っている。「工業ではドイツが勝るが、食と文化ではフランスが優位、まさに生活の芸術ではないか」というほど。それでも職を辞することなく、心の葛藤と闘いながら、記録を綴っていく。処刑する人物のリストアップに戸惑いながら、議論の末、政治犯、思想犯の多いシュワゼル強制収容所から27名を選び出すことに。収容所長も大反対するが、副知事の命令には逆らえない。フランス人側もドイツ軍側も、この理不尽さに胸を痛めるが、命令には従うしかない。戦争という大きなうねりの中で、個々の力はちっぽけなものだ。回り出した権力には逆らえず、歯車の一つでしかないのが悲しい。

報復リストの中には、明日釈放予定の新婚ホヤホヤの若者もいるし、まだ17歳の少年もいる。彼は映画館でドイツ軍の占領に反対するビラをまいただけでの罪なのだ。「この人選は大いなる過ちだ」と副知事は主張するが、認められない。収容所に副知事がやってきたことに疑問を抱いた男タンボーは、労働組合を動かし、大きなストライキを何度も指揮した男だけあって、収容所でもリーダー的存在だ。処刑を感じ取った彼は、仲間たちに、心の準備を伝える。神父がやってきて副知事に言う「命令の奴隷になるな、良心の声を聞きなさい」。

銃殺の日。人質は皆、勇気を振り絞り、目隠しを拒む。ドイツ軍兵士のハインリヒ(シュレンドルフ監督が尊敬するハインリヒ・ベルをイメージした創造上の登場人物)は、銃殺の任務にパニックになって動けなくなるが、代わりに兵士が立てられ、容赦なく銃殺は行われていく。ラストシーンは涙が止まらない。銃殺される前に書いた彼らの手紙だ。「無実の罪でドイツに殺される。人生に一点の後悔もなく勇敢に死に赴く。ずっと君を愛している。僕と同じように勇気と信念を持って生きてほしい」などなど。

戦争はいかに虚しいものか、狂気の中で行われる愚行——いったい人間ってどこまで愚かしいのか。シュレンドルフ監督のメッセージをしっかりと受け止めておこう。(柏市の「キネマ旬報シアター」で2015年1月31日より2週間限定公開。DVDは2015年前半発売予定)